関釜裁判ニュース

2002年11月17日発行

第40号

釜山「従軍慰安婦」
女子勤労挺身隊
公式謝罪等請求事件

戦後責任を問う
関釜裁判を支援する会

関釜裁判とは、一九九二年一二月、韓国釜山市などの元日本軍「慰安婦」と元女子勤労挺身隊の十人が、山口地裁下関支部に、日本国の公式謝罪と賠償を求めて提起した裁判である。九八年四月、「慰安婦」原告に一部勝訴判決がでた。しかし、広島高裁で、二〇〇一年三月、「慰安婦」原告逆転敗訴、挺身隊原告の請求は全面棄却となった。現在、最高裁に上告中。

来年四月一日提訴（第二次不二越訴訟）

花房　俊雄

去る十一月七日、金沢で第二次不二越訴訟に向けての支援者と弁護団との会議に参加してきました。小松空港に降り立つと、白く雪をかぶった白山の山々が出迎えてくれました。

会議で確認されたことは、来年の四月一日に富山地方裁判所に提訴する。現在二二名の元女子勤労挺身隊員らが聞き取り調査を終え、原告予定者になっていることです。今後さらに増えていきそうです。現在北陸三県から七人の弁護士が参加されています。今後さらに多くの弁護士に参加を呼びかけて行くことになりました。

昨年の十月に続き、今年七月にも柳（ユ・ト）さんたち四人が不二越の本社を訪れ炎天下で一時間以上交渉を求めましたが、会社は鉄柵を閉ざし、あまっさえ背後に警察官を待機させていました。これが二年前に七人の元女子勤労挺身隊と最高裁和解した不二越の態度でした。被害者たちは激しい怒りに包まれて記者会見し、新たに裁判で不二越を訴えることを宣言しました。

会員の皆様には、今秋に提訴の予定でカンパを呼びかけ、多くの方々から厚意を寄せていただきましたことを感謝いたします。

▲元従業員であることを示す書類を見せる柳ト さん（不二越前で）

地元における弁護団の結成に手間取り、提訴が半年ほど遅れてしまいました。関釜裁判の原告たちから、「裁判はまだか」との問い合わせが相次いでいましたが、ようやく決まり、ほっとしています。

去る七月末に不二越の元女子勤労挺身隊の関釜裁判原告三人と光州遺族会に申告している三人、合わせて六人の聞き取り調査に行きました（詳しくは韓国訪問の報告をお読み下さい）。

光州遺族会の三人は、夫に挺身隊に行ったことが知られ、「慰安婦」と誤解されて夫にそむかれながら、たくましく子どもを育られてきた方々です。この六人の方々は、不二越訴訟で富山への行き帰りを私たちと行動をともにします。福岡、広島、福山、三次で今後交流を重ねながら、不二越訴訟への支援を広げていきたいと思っています。

関釜裁判は十二月二五日で十年目を迎えます。十年前に比べて予想だにしなかったほど、日本の国家主義・軍事化が進んできました。一方、遅々としてではあれ戦後補償の闘いも前進してき、日本の国家主義への傾斜と鋭く対峙しています。十年前に原告たちと出会って、「なんとしてもハルモニたちの思いを実現したい」と願った思いを新たにかみしめながら不二越訴訟に取り組んで行きたいとおもいます。皆様方の変わらぬご支援をお願いいたします。

最高裁和解二周年
―不二越闘争報告（七月八日）

（参加者・土井、都築寿、花房俊、福留）

①富山社会保険事務所との交渉（十時～十一時半）

今年四月に着任した杉原所長が被害者と社会保険事務所と不二越のプライバシー保護を理由にマスコミを締め出そうとし、MBCや支援者の抗議によって撤回。厚生年金の脱退一時金の支給が柳Tさんに二一円、李B（イ・B　）さん、安H（アン・H）さんに一八円、李J（イ・J　）さんは六ヶ月未満で不支給。被害者たちは現在の貨幣価値になおすと三万五千円ぐらいになるのに、当時の貨幣価値のままである事に怒りを込めて抗議し、受け取りサインを拒否し金を置いて退出した。

②不二越本社前闘争（十三時～十四時二十分）

マスコミの見守る中、被害者四人が元従業員であることを示す書類をかざして面会を求めたが、鉄柵を閉じて「会う事はできない」と名前も名乗らない責任者が繰り返すのみで、女性ガードマンを前面に立てて一〇人ぐらいが構内でガードに就き、ビデオ撮影をしていた。石川連絡会代表の漆崎牧師や被害者が切々と面会を訴えたが、全く無表情な対応に終始した。柳Tさんが「門を超えて突入したいよ」と怒っていた。帰り際に不二越工場の角の警察署に一〇名ぐらいの警察官が待機していたのが判明。昨年秋の門前闘争に比較しても、不二越側の完全沈黙と警護の強化が際立っていた。

③記者会見（十五時～十六時二十分）
富山教育文化会館

富山連絡会の渡部代表の司会で、李Bさんが「新不二越訴訟宣言」を読み上げ、それぞれが不二越側の対応に対する無念の思いと訴訟への意気込みを語った。中川さんが今年度中の訴訟を準備している事を説明した。マスコミからの活発な質問があった。

④富山県集会（十八時三十分～二十時）

冒頭、門前闘争の模様がスクリーンに紹介され、その後漆崎牧師の司会で始まり、渡部牧師が不二越側の態度を批判し、被害者とともに闘うと力強く挨拶をした。山田弁護士、被害者や福岡、広島からの発言の後会場からの発言も相次ぎ、盛り上がった集会になった。

原告の思いを受け止めたい

不二越訴訟を支援する北陸連絡会
中川美由紀

私は一〇月一二日から一六日にかけて韓国に初めて訪れ、不二越第二次訴訟の訴状作成のための聞き取りを行った。一一名の元女子勤労挺身隊員と元徴用工一名の方から直に証言を聞くことができ、動員された経過や労働生活実態、そして家に戻る経過、その後の生活など不二越の強制連行・強制労働の全体像がさらに明らかとなり、あらためて怒りを感じた。

原告予定者が当時について一様に訴えているのは、労働が厳しく全く自由がなかったこと。とにかくひもじかったこと。病気やけがをしても治療をしてもらえなかった苦しさ。そして、空襲の恐怖である。富山では四五年の春ごろから空襲がひどくなり、八月一日に富山市内が全焼する大空襲があった。彼女たちは寮からふとんを持って田圃や川べりを逃げた。「町が真っ赤に燃えていた」。

昼夜をとわない空襲のあまりのつらさに「ここで死んでもいいから眠りたい」とまで思ったそうだ。その恐怖は今も蘇る。「今でも空襲の夢を見る」という方がほとんどだった。

日本の戦局の悪化に伴い不二越への動員が強化された一九四五年の春の動員は、「クラスでくじ引きで決めて行かされた」「役所から指名された」と文字通り強制連行そのものだった。李K（イ・K）さんもその一人だ。おじさんがすでに強制連行され行方不明になっていた中で指名を受け、「もうこの世の終わりと思った」そうだ。李Kさんは友人と一緒に不二越から一度逃げている。しかし、警察に見つかり殴られ、連れ戻されてしまった。彼女は当時流行ったという日本の歌を歌ってくれた。「後は頼むよあの娘へよ、これが最後の便り、今日もどこかでラッパの音」。

とても悲しい歌だった。命令に背けば死を意味し、生きて戻って来られないという悲しみの中で家族と別れた彼女らの苦しみは計り知れない。

同時に、彼女らの背後には今証言することもできない数多くの方々がおられる。今でも不二越の社員手帳を持つ裵S（ペ・S）さんは、熱病にかかり、入院もできずに九死に一生を得た。しかし「同じ学校から不二越に来た四人の友達のうちの一人は腸チフスで亡くなり、遺体を野原で薪を組んで焼き、花を添えました」と証言している。

生まれ育った故郷を遠く離れた日本で、病気で亡くなったり過酷な労働から逃亡したまま行方知れずになったきりの方々は一体どのくらいいるのだろうか。不二越から逃亡して捕まって軍隊慰安婦にさせられた姜徳景（カン・ドッキョン）さんについて、不二越は敗戦まで働いていたことにして厚生年金をかけたままにしていた。歴史の闇に葬り去ろうとしていた実態を明らかにしていかなくてはならない。

生き証人である彼女らの証言をもとに、不二越に強制連行された一六〇〇余名全員に対する謝罪と賠償を必ず行わせなければならないと思う。「私が生きているうちにきちんと謝ってほしい」。

七〇歳を超えた原告予定者たちの切実な思いをしっかりと受けとめ、必ず勝利したい。

韓国訪問報告

花房恵美子

七月二十九～八月二日、原告を訪ねて、広島の土井桂子、塚本勝彦、福山の都築寿美枝、谷元絢子、福岡の花房俊雄、恵美子が訪韓した。釜山では関釜裁判が始まった頃通訳で来られていた朴ヘレナさんの同行で、昨年の八月に亡くなられた鄭水蓮（チョン・スヨン）さんの家を訪ね、お嫁さんにお悔やみと裁判の経過を報告して、生きているうちに解決できなかった事をお詫びした。お墓は釜山の土地事情でつくられず、散骨されたとのこと。ピアノの上の壁にかけられた遺影に黙祷した。

姜YO（カン・YO）さんと李YO（イ・YO）さんには沼津紡績工場を戦後吸収合併した帝人との交渉を報告。

不二越訴訟に備えて朴SU（パク・SU）さんの聞き取り調査をした。柳T（ユ・T）さんも元気であったが、私たちと別れたあと体調を崩し、二回ほど病院通いをしたとのこと。

光州では李金珠（イ・クムジュ）さん、梁錦徳（ヤン・クムドク）さんらの出迎えを受けた。連れ合いが亡くなったあとカトリック教会が運営する老人ホームに入っている李順徳（イ・スンドク）さんを訪ね感激の再会をした。別れ際号泣された。

李昇勲（イ・スンフン）君も加わり不二越訴訟に備えて、光州遺族会に申告されている成S（ソン・S）さんの聞き取り調査。

翌日ナヌムの家の朴頭理（パク・トゥリ）さんを訪ね朴博子さんとも合流。夜、能光院長の主催で交流会が開かれ、多いに盛りあがる。朴頭理さんの補聴器からピーピーと電子音がしきりにしていた。耳の慢性的な炎症による耳垂れで補聴器がすぐ壊れるとのことだった。翌朝朴SO（パク・SO）さんの聞き取り調査。涙を流して別れを惜しむ朴頭理さんを後にしてソウルに。光州遺族会に申告された、金J（キム・J）さん、羅H（ナ・H）さんの聞き取り調査。

詳しくは参加者の報告をお読みください。

―朴SUさんからの手紙―

（原文のまま）

お元気ですか
いつものように　月々おせわになって
どうもすみませんね
日本も寒いでせうね
韓国はうすこうりまで・・
今　手紙をかいて居る中に
お金と書るいをもらいました。
みな様に　あんまり　お世話ばかり
かけてすみませんね
しょるいをだしながら　日本のおいしゃさんから
診さつしたしょるいも　いっしょに　会社にだして下さい
くすりを一生がいのんで　のんだ後のよく日の　くるしみ
くやしくて　たまらないですね。
いらない話ばかりかいて　すみませんね
つけもの（キムチ）の話は　どうですか
お元気でね

二〇〇二年一〇月二五日

原告を訪ねて

七月二九～八月一日

谷元絢子（福山）

六月のある日、広島の土井さんからの電話で原告を訪ねての韓国への旅のおさそい…。仕事を調整すれば参加できなくもない。どうしよう、どうしたい…。とにかくこの機会を大切に、もう一度韓国でハルモニたちに会ってみたい。話をききたい。

そんな思いで皆さんに同行しました。

初めての海からの釜山入り。ワァー　韓国だ。と思う間もなく、花房さんたちは鄭水蓮（チョン・スヨン）さんの家へ、塚本さん、土井さん、谷元は小さな韓式ホテルの一室で、朴ＳＵ（パク・ＳＵ　）さんのお話を聞きました。

関釜裁判の中で彼女の陳述は聞いていましたが、直接細かな質問に答えてくれる朴さんはまるで別人のよう。身ぶり、手ぶり、当時つくった歌をまじえての話に、つらくてきびしい内容なのに、なぜか皆で笑いころげてしまいました。

「イヤダ　イヤダヨ　不二越は
カミナリオヤジのいうことは
聞いても　しゃべるな　ヨースルニ」

一三才の少女のころ、日本にいくこと、そこにいったらおもしろいことがある、自分の力で金もかせげる、勉強もできる、飛ぶような気持ちだったとハルモニは語る。

「とやま　くるとき　うれしかった
一夜　すごせば　悲しさよ
いつ　この工場　去れるでしょうか」

現実はくる日もくる日も、わずかの食事と重労働。監視された暮らしの中でも歌をつくり、気持ちをはらしていたハルモニ。自分は若い頃から歌をうたったり、人を笑わせることが大好きだった。そういうことを全部こわされてしまった。

・・生きているうちに働いたお金を返してほしい・・

すごくストレートな、原告ハルモニの静かな叫び・・

私は関釜裁判を支援する一人として、そのことに応えることができなかった。広島高裁であんな判決を迎えることになって、それでも日本の裁判の現実はこんなものだと冷めた気持ちがあって…

ハルモニたちの無念、くやしさにどれだけ向きあえたかと、今更のように思いました。それから光州、ナヌムの家、ソウル、四人の原告の話をていねいに聞きながら、不二越訴訟のきびしさを考えました。

日本の暑い夏の日常に戻り、突然のマゴとの同居のさわがしさの中、自分ができることのあまりのわずかさに身がすくみます。それでも逃げない、あきらめない道はどこかにあるはず。

それを戦争責任を問う闘いとして、仲間と共にさぐっていきたい。

▶おどける朴ＳＵさん

第二次不二越訴訟原告を訪ねて

関釜裁判を支援する福山連絡会　都築寿美枝

七月二九日から八月二日まで関釜裁判を支援してきた福岡、広島、県北、福山のメンバーで、第二次不二越訴訟原告、関釜裁判原告を韓国にお訪ねした。提訴に必要な準備書面作成のための聞き取り調査と原告たちとの交流が目的である。これまで何回も交流してきたハルモニ、初めてお会いするハルモニ、それぞれ歩んでこられた人生からまた貴重なものをいただいたような旅だった。

七月三〇日釜山から高速バスに揺られること約四時間、二二年前韓国民主化闘争で多くの犠牲者を出した光州（クワンジュ）市に到着。太平洋戦争犠牲者光州遺族会事務所（李金珠（イ・クムジュ）さん方二階）でハルモニたちと久々の再会を喜び合う。翌三一日、成Ｓ（ソン・Ｓ）さん（七二歳）の聞き取り調査をした。今回の聞き取り調査中、重要な裁判証拠になりうる写真が確認された。一九四五年一〇月一九日米進駐軍が博多港での引き揚げ者を撮影した中の「帰国を喜ぶ少女たち」の中に成さん自身が自分を確認したのである。聞き取り最後に成さんは「私はこんな生活をしてきたのでお金はないけれど、体を動かして闘うことはできる」と力強く締めくくった。

同日、梁錦徳（ヤン・クムドク）さんの案内で光州市郊外の丘の中腹にあるカトリック系養老院に日本軍性奴隷被害者の李順徳（イ・スンドク）さんを訪問した。三ヶ月前に連れ合いさんを亡くし、いよいよ天涯孤独の身となりこちらへ来られたという。私たちの訪問を大変喜ばれ、「ウスセヨ（笑って）！」の合図ににっこりほほえんでカメラに収まる李順徳さんであったが、握った手は冷たく健康状態が決して良好ではないことを予感させた。おみやげの風鈴の音色を聞きながら、そのうち昔話に入っていくと彼女は室外の様子をうかがいながら声を落としてこう話し始めた。

「ここの人たちは私が慰安婦をしていたことは知らない。絶対知られたくない。もしここの人が私のことを知ったら、きっと私のことを『汚い女』だというから。・・・私は何も知らない子どものとき、ヨモギを摘んでいたら男が来て無理矢理さらっていった。上海に連れて行かれ、軍人に服を裂かれ、あの人たちは私に無礼を働いた。出血して痛くてたまらなかったけどお構いなしだった。抵抗して殴られた頭が今も痛い。起きている間はずっと痛くてたまらない」。

はじめは声を潜めて話し始めた李順徳さんだが、そのうち体中の毒素を吐き出すように一気に語りきった印象を受けた。玄関で何度も何度も振り返り、「又来てくれるか。又会えるか」と泣きながら別れたあの顔が忘れられない。

八月一日光州空港からソウル金浦空港を経てバスでナヌムの家へ。水曜デモで疲れておられるはずのハルモニたちだが日本からの訪問にご機嫌で夜遅くまで歌い続けた。久々に彼女たちのバイタリティーを肌で感じる夜であった。次の朝、ソウルから合流した朴ＳＯ（パク・ＳＯ）さんの聞き取り調査である。朴ＳＯさんは裁判を通じて知り合った朴頭理（パク・トゥリ）さんにわざわざ会いに来たのである。挺身隊被害

者である朴SOさんの聞き取り中、日本軍性奴隷被害者の朴頭理さんがちょっと距離を置いて寄り添っておられた姿が何ともいえずいい感じ。二階では金順徳（キム・スンドク）さんが新しい絵の解説をしてくださり、「戦争がなく、『慰安婦』にされなかったら何になりたかったの？」の私の質問に「本当はもっといろんなことを勉強して学校の先生になりたかったけど、それはできなかった」とため息混じりにおっしゃるので、「学校の先生ではないけれど、ハルモニは絵や自分の言葉で私たちに大切なことを教えてくださっているじゃないですか。私たちにとっては立派な先生ですよ」という私の言葉に「ウン、ウン」と頷かれるのであった。

ナヌムの家のみなさんとお別れして午後はソウル市カンビョン駅前テクノマートという巨大なショッピングセンターへ。元不二越挺身隊員の羅H（ナ・H　）さん、金J（キム・J　）さんと合流し、イタリアンレストランで聞き取り調査開始。金Jさんには花房恵美子さん、土井桂子さん、谷元絢子さん、通訳は、関釜裁判のとき朴頭理ハルモニに付き添ってこられた朴博子（パク・パクジャ）さんが、羅Hさんには花房俊雄さん、塚本勝彦さん、都築寿美枝、通訳は大邸の李さんが当たった。彼女たちの話は光州で聞いた話と同様で本当に苦労の連続であったことが改めて立証されるものであった。

羅Hさんの夫は彼女の引き上げ場面を目撃したという近所の噂から「解放直後に外地から引き上げてきた若い女性は慰安婦だった」という挺身隊員と「慰安婦」の混同から「おまえは淫らな女」と蔑視し、虐待してきたという。「苦労して育ててきた四人の子どもたちも父親と同じような目で自分を見るので今は本当は家族と離れて一人で生きたいと思う」の言葉にしばし返す言葉が見つからなかった。

「ハルモニ、ここでは一人二人ですが、韓国全土にはハルモニと同じような苦労をされ、日本の国や不二越に対して謝罪と補償を要求して立ち上がっている方もたくさんおられます。仲間がたくさんおられますよ。そしてわたしたちもハルモニたちを応援していますから元気を出して一緒に頑張りましょうね」という励ましに彼女の顔が確信を得たようにしっかりと前を向いてほほえんだ。裁判のための証言聞き取りという形で自分の体験を聞いてもらい、今まで何十年間も我慢してきたつかえを一気に吐き出した安堵感、満足感からか、ハルモニたちの表情に自信が読みとれた。「このハルモニのこの瞬間に立ち会えてうれしい」という感情がこちら側にもあふれ出た。

予定のスケジュールを終え、ハルモニたちからのおみやげの菓子袋を抱えて一行はここで解散、それぞれの帰途についた。「さあ、ハルモニたちと共に第二次不二越訴訟だ。頑張るぞ、まけられないぞ！」という思いを胸に。

◀羅H さん

こころの癒し

塚本勝彦
（関釜裁判を支える広島連絡会）

関釜裁判の原告ハルモニの激励をということで訪韓の誘いにのった。ハルモニに会うのは〇一年三月二十九日、広島高裁判決以降久しぶりだ。キムチ交流会のきっかけとなった釜山の柳Ｔさん、高暮ダムでの現地追悼式に参列された光州の李金珠さん、写りをことごとく嫌われながらも宮島の五重の塔前ではポーズをとられたＹさん、階段で手を差し延べたとき「韓国では主人以外の男と手は触れない。そんな行為は許されない」と叱られたソウルの朴ＳＯさんなどハルモニたちの顔がさまざまに浮かぶ。

博多港に集合し打ち合わせを行う。関釜原告ハルモニへの激励と不二越第二訴訟にむけて新たな原告となる人の聞き取りを行うという。年配者に対する聞き取りはうまくゆくだろうか不安が過ぎるが自然体で接することにした。私は初めて「ナムヌの家」に行く。それだけに楽しみにしていた。

「ナムヌの家」は主要道路から谷間に十分あまりいったところにはあった。話に聞き、資料も買ったが初めて立ち寄る。自然豊かで落ち着いたところだ。左手のログハウスの建物は事務所。広場の向こうにハルモニたちが生活する二階建ての近代的建物。左隣の八角形二階建の建物は礼拝塔とでも言うのか内部は畳にして二十枚入りそうな大広間である。広場の左手に新たに資料館ができていた。近日に開館式を計画されているそうだが中に入った。九一年「私は、かって日本軍の性奴隷とされた」と証言（人として怒りの尊厳回復宣言であろう）された金学順さんの写真をはじめ、ハルモニたちが書いた絵などが展示してある。日本軍によって踏みにじられた事実を実証する空間「館」として語り継がれることだろう。中庭の片隅の手洗い場の小石に顔や花が書いてあった。絵を描くことによって過去が癒されたのであろう。あたりの植え込みしてある草花、野菜一つ一つが心の癒しであろう。夕食時、ナムヌの家の居住者がでそろう。夏休みいっぱいハルモニの世話をするという名古屋の男性、白人系外国人（私たちも黄色系外人か）、激励にきた人を合わせて約二十人余りがつどう。食事後の交流会に入る。自己紹介ののち歌が出る。白人系外国人はハルモニたちの人生を音楽で表現したいという。歌もうまい。―　太鼓をたたき―　朝鮮古典リズムで真っ赤な顔をして歌う。拍手喝采だ。私は、このような場は好きだが歌は苦手だ。二曲ぐらい歌えたらと思うがいまだ練習をしたことがない。気難しそうな朴頭理さんもしだいにふんいきにのせられた。何か家庭の悩みを打ち明けているようだ。機嫌を取り直して歌いだした。

シモネタの歌か意味合いは分からないが歌いころげるような陽気さだ。ハルモニたちも転ばんばかりにはしゃぐ。腹の底から笑い転げる。光州から一緒になった李昇勲氏が農の数え歌であろう歌を披露した。歌詞を聞いて見たかった。

懇親を終えて、中庭の涼み台で朴頭理さんが若い女性にマッサージを受けていた。私も肩をもんだ。私の母と比べものにならないほど分厚く固い肩だった。首筋をもんだ。嫌だといっていたがしだいに頭を預けてきた。肩も首筋もゴツゴツしていた。機嫌がよかったのか夜遅くまで話していた。翌朝全員で写真を撮った。みんな笑い顔で元気な姿であった。ハルモニたちの心の癒しになったことだろうか。私も深く大きな感動をいただいた。ありがとう。

成S（ソンS）（木浦市在住）さんの聞き取りのまとめ

成S さん

私の家族は両親と四人兄姉で私は末っ子です。父は農業を営んでいました。長兄は結婚して光州で生活し、次兄は私たちと同居していました。姉は女性を供出する噂であわてて結婚していましたが、夫は「悪い人」でアルコール中毒で、姉に暴力を振るい、苦労しました。彼は昨年死亡しました。

募　集

私たち家族が木浦から光州に引越して、私が瑞石国民学校四年生になった頃です。オカという先生が「日本に行ったら女学校に通うことができ、お金もたくさん稼ぐことができ、結婚費用もできる」と言うので行くことを志望しました。父母は「転入したばかりなのに」と、驚いて必死で行くのに反対しましたが、先生との約束が全て良かったので行こうと堅く心を決めました。先生の言葉を信じたのです。

それに姉の結婚生活を見ていて、働きながら勉強できるのは良いと思ったのです。

出発、富山へ

翌日、一月一五日の早朝、母に知られないよう家を出てオカ先生について行きました。その時の私の歳は十五歳で、何の分別もなかったのです。光州駅に十四人集まり光州部隊として出発しました。私はその十四人の班長という役割を自分に与えられたのを知りました。オカ先生については行きましたが分別がなかったので、全てのことがとても恐く、しろと言われるとおりにして釜山に到着し、船に乗って行った所が下関でそこでまた汽車にのりました。岡山から大阪を通り、このあたりは気候が暖かいなと思ったのを覚えています。その時、みかんを食べました。釜山では木浦、麗水、順天等からきた娘たち合わせて全部で一四四人になりました。

富山に着いたら雪が降っていました。歓迎式があって、ブラスバンドで迎えられ、写真を撮りました。

寮に入りましたが、全国各所から六〇〇名の少女が動員されて来ていました。

富山での生活

寮では出身地別にされ、光州部隊の十四人は同じ部屋でした。部屋は十畳くらいで、頭を突き合わせて寝ました。その時訓練隊長が来ました。名前はスダという背の高い美人の女性の訓練隊長でした。訓練は普通、駆け足、整列などの体力訓練でした。

朝五時頃に起床し（ラジオの音で起こされた）暗くなるまで働きました。当時食事があまりにも少なく、質が悪い食べ物でしたので非常なひもじさを経験しました。朝夕は麦中心の食事、昼は三角形のパンでした。

仕事は旋盤工で、ハンドルが大きく、重たかったので、疲れ過ぎて腰が痛くて倒れたら、班長が来て私を叩きました。私たち

に対して教官たちが非常に残酷でとても恐く毎日泣いて過ごしました。そして泣いているのがわかるとどでも酷い罰を受け気合いを入れられました。

私は幼な心に疲れ耐えられなくなり、病気になりました。体の調子が悪いのに関わらず工場で鉄を削る仕事をするのは、幼い私たちには力に余る重労働でした。仕事をしている内に倒れた人たちがほとんど死にそうな状態でも仕事をさせて、死ねもせず仕事をしました。私も三回倒れたのでその時は病院に運ばれました。それで病院に二〇日間入院しましたがその時の「疫病(腸チフス)」という名の病気の熱病で多くの人たちが入院し病院でもあまりに不充分な食事で食べられず、死んだ人も少なくありませんでした。入院中は梅干の入ったおかゆを食べました。

その中でそれでもオカさんという引率していった人が親切にしてくれて、その方に「オンマ、オンマ」と言いながらしがみついて泣いたりもよくしました。

全快しない状態で続けて工場で仕事をしたのですが、私はその時病気の後遺症で頭の毛が残らず抜けて、羞恥心で帽子をかぶって外に出ました。多くの人たちが頭髪が抜け、帽子や手拭いをかぶって歩いていました。そんな状態でもずっと旋盤で辛い仕事をしたのですが、一番耐えられなかったのが、仕事はきつく食べるものはあまりに不充分なためほとんど皆栄養失調の状態だったことです。その時の後遺症で私は今でも体が弱くいつも苦しんでいます。

それでも仕事を続けましたがある日突然、空襲だと布団を一枚ずつくれて、相当遠い田んぼのところで布団をかぶってうつ伏せになっていろと言われて身を伏せていました。その時空を見ると、B二九という機が数十機空にいっぱいになり富山市に爆撃をしました。その時は夜の一二～一時の間だったと思います。それで水がいっぱい張られた田んぼで伏せたまま夜を明かしました。

次の日隊長に起きろと言われて起き上がってみると、富山市は完全に火の海になって、空には飛行機がいっぱい飛んでいました。

再び引率されて寮に帰ると、死んだ人、死にかけている人が大半でした。それから寮に入ってみると、泣き声であふれていました。富山市は全体が廃土となり、私たちの工場だけが残っていました。警戒警報がたびたび出て一九四五年八月一三日から一四日がいちばんひどかったです。

帰国

そうした後八月一五日の解放になりました。だけど私たちには何も言ってくれず分からなかったのですが歩きまわっているうちに、日本人たちがラジオを聞いて泣いているのを見て、私たちも解放されたことを知ることができました。だけど解放になった後も私たちを帰してくれもせず、何の対策も立てない状態で私たちを放置したようにしているので、私たちは在日朝鮮人の家に物乞いをして、どうにか延命をしていました。とてもお腹がすいて人の庭から柿ひとつとって食べ、見つかってひどく殴られたりもしました。その時の苦労は考えるのも嫌です。

解放になった後二か月が過ぎてから、私たち一四〇人は富山駅まで会社が送ってくれて、汽車に乗り、博多に行き、博多から船に乗せられ釜山に着きました。博多ではアメリカ軍に写真を撮られたことを覚えて

います。その写真（木村秀明氏編集の「進駐軍が写したフクオカ戦後写真集」のなかの「帰国を喜ぶ少女たち」――一九四五年十月十九日写）に私が写っているのを見つけました。全羅南道から役人が釜山に迎えに来ていて私たちを連れて行き、再び故郷に帰ることができました。両親はとても喜びましたが生活が苦しく、父は私が結婚した後亡くなりました。

戦後の生活

私は小学校で強制労働させられて勉強ができなかったので、就職口がありませんでした。一八歳で結婚し、一九歳で出産しましたが、二三歳の時夫は私が挺身隊員だったことを知り、「汚い女」と言い、近寄らなくなりました。挺身隊は「慰安婦」と思われていたのです。私が産んだ子ども四人と、夫が他の女性に産ませた子ども四人を自力で育てました。浄水機の会社や美容院の経営もしました。婦女会会長をしたこともあります。

四二歳の時に夫から離婚を要求されましたが、あまりに腹が立って応じませんでした。今は一人でアパートに住んでいます。

▶帰国を喜ぶ少女たち

少し仕事をして、不足分はソウルにいる息子が払っています。

今の思い

空襲のことは今でも思い出し、心臓がドキドキします。頭痛、心臓病、不眠症等の病気に加え、夫には殴られ、女性の問題もありよく泣きました。不眠症は今は治りました。

私たちは何の補償も慰労の言葉ひとつ聞くことなく、今までその後遺症で健康を壊されたままで苦痛です。死ぬまでには被害を解決したいし、「恨（ハン）」を晴らしたいです。

どうか私たちの無念で苦しかった歳月を充分くみ取って補償してくれることを望むばかりです。

中国人強制労働事件・福岡訴訟
控訴審　第二回口頭弁論
十二月二〇日（金）
午後一時三〇分から
福岡高裁五〇一号法廷
弁護団の意見陳述（迫力ありますよ！）

仕切り直しの第一歩

七月二〇日吉見さん講演会報告〜

日原広志

去る七月二〇日（土・海の日）、ふくふくプラザにて『「つくる会」教科書を許さない市民ネットワーク・福岡』主催による吉見義明氏講演会『「慰安婦」はなぜ教科書から消されたのか？』が行われた。

準備段階では「数年前ならいざ知らず、今の状況下で慰安婦学習会に人を集めるのは困難」と予想されたが、ふたを開けてみると、当日は、福岡近郊のみならず、遠くは広島や九州各県からも人々が駆けつけ、狭い会場に溢れた一〇六名の参加者が、座席を埋め尽くし、通路や入り口にも聴衆が（スタッフが座る地べたを見つけるのに苦労するほどに）万遍なく座り込む盛況となったのは嬉しい誤算だった。冒頭の松岡さんの開会挨拶は、「吉見先生の話を聞く学習会に徹する」との趣旨から、遅れてきた集会慣れした人々が「えっ、もう吉見先生の話始まってるの？」と唖然とする程に、スピーディーに打ちきられ、一同は第一部の講演『「従軍慰安婦（日本軍性奴隷制）」問題の所在』に聴き入った。

公娼制と軍慰安婦制の類似点と相違点とを明確にすることを通して、現時点での学問的な「慰安婦」概念整理を行い、今後の運動の課題と方向性を示唆したその講演内容は素晴らしく、聴衆にも「分かりやすかった」と好評で、後日パンフレットの形で発行した講演録は全国から引きも切らぬ注文が殺到している。詳細はそちらに譲るが、画期的な講演だった。

これほど学問的に、政治的意図・運動論的必要による取捨選択を抜きにして、「慰安婦」の全体像を学べたのは初めてだったので、逆に慰安婦を巡る議論になぜこれほどの彼我の落差が生じるのかの問題性も浮き彫りにされたように思える。これからの「慰安婦」支援は今日明らかにされた全体像から再出発されねばならないと多くの者が感じ取った。

一方で今回取り上げられなかったテーマとしては①なぜ教科書から削除されたのか（「集会のタイトルと講演の内容が違う」との意見あり）②日本軍の本質の問題などがあり、今後に学習の機会が待たれるものである。

第二部では、花房さんが各地の「慰安婦」裁判と立法運動の現状について報告。会場に設置された全国「慰安婦」裁判パネルが好評で、もっとじっくり見てもらう時間がないことが惜しまれた。また愛媛県における「つくる会」側の攻勢についての最新情報は初めて聞く人も多く、会場に衝撃が走った。会場カンパと合わせ後日六二〇〇〇円が愛媛に送られた。最後に山田先生が高校歴史教科書の問題をアピールし、集会は幕を閉じた。

集会に人々が殺到した背景には、「つくる会」側の「リベンジ」に向けた不気味なまでに地道な継続的運動に対する、現場の危機感がそれだけ高まっていることを物語る。教科書を巡る当面の攻防に向かっても、「慰安婦」全体の尊厳回復を実現する息の長い取り組みに向かっても、仕切り直しの第一歩ともいうべき集会となったことを感謝したい。

なお、吉見先生は十一月九日に広島でも同様の講演を行う予定。（本原稿執筆時点）

パンフレットが完成しました

吉見義明氏講演録 (2002年7月20日 福岡にて)

「従軍慰安婦(日本軍性奴隷)」問題の現在

発行 :「つくる会」教科書を許さない市民ネットワーク・福岡
編集 : 戦後責任を問う・関釜裁判を支援する会
発行日 : 2002年9月17日
サイズ : B5版 42ページ
定価 : 400円

内容
第1章 問題の所在
第2章 「官憲が直接手を下した奴隷狩りのような強制連行」だけが問題なのか。
第3章 徴募時の強制
第4章 「従 軍慰安婦」制度と公娼制度の異同の問題
第5章 「従軍慰安婦」問題をどう考え、どう教えるか。

緊急シンポジウム！

「愛国心・日本人の自覚」を成績評価してよかと？

11月30日（土）　午後2時～5時

ふくふくプラザ　5F　視聴覚室
（地下鉄唐人町4番出口より徒歩5分
℡092-731-2929）

資料代　500円

福岡市の小学校69校で、6年生通信表の社会科に、「愛国心、日本人の自覚」の評価項目が設けられていることをご存知でしょうか？全国でも例のないことであり、福岡市の突出ぶりに関係者の驚きと注目を集めています。　共にこの問題を考えてみませんか。緊急シンポジウムにご参加ください。

パネリスト

出水薫さん　（九州大学大学院教員）
松浦恭子さん　(弁護士・教育基本法改悪に反対する市民の会・福岡)
鄭琪満（チョン・ギマン）さん　(ウリ・サフェ《私たちの社会》会長)
松尾一さん　(小学生保護者・「愛国心」評価項目の削除を求める市民の会代表)
河東正憲さん　（小学校教師・全国在日朝鮮人（外国人）教育研究協議会・福岡）

主催　「愛国心」評価項目の削除を求める市民の会
ウリ・サフェ《私たちの社会》～「在日」の人権と生活を共に創造する会～
全国在日朝鮮人（外国人）教育研究協議会・福岡

女性国際戦犯法廷に学ぶ～なくそう！女性への暴力と戦争

11月23日（日）

午前10時～12時半
福岡県クローバープラザ1F
クローバーホール

TEL 092-584-1261(あすばる)
JR春日駅前、西鉄春日原駅歩10分
入場 無料
主催 「戦争と女性への暴力」ふくおかネットワーク

ビデオ 松井やよりさんのメッセージ

「女性国際戦犯法廷の記録」

講演 西野瑠美子さん

「日本軍性奴隷制とハーグ判決」

講演は松井さんの予定でしたが、倒れられビデオでの報告となりました。
女性法廷で命を削られた松井さんの健康の回復を祈ります。

下関判決を生かす会
（日本軍性暴力被害者裁判支援連絡会）のページ

2002. 11

「下関判決を生かす会」（生かす会）は、98年4月、山口地裁下関支部で出された「関釜裁判」判決を生かして、「慰安婦」問題の早期解決をはかるため、裁判支援グループを中心に作られた連絡会です。

台湾裁判、控訴へ

10月15日、台湾人元「慰安婦」損害賠償請求訴訟の判決が東京地裁で言い渡され、原告らの請求がまたも棄却されました。寺尾洋裁判長は判決を前にして交代したため、朝香紀久雄裁判長が代読したその判決は、事実認定すらせず、「国際法は被害者個人が加害国に直接請求する権利を認めていない」「当時、国の賠償責任について規定した法律が存在せず、不法行為責任は追及できない(国家無答責)」としたうえ、立法不作為も否定するという、極めて不当な判決でした。昨年の中国2次訴訟判決が事実認定の中で被害者らの PTSD 被害にまで言及していたのに対し、今回の台湾判決は甚だしく後退する内容です。遠路をやってきた原告らに、またもやこのようなひどい判決を聞かせなければならなかったことに対し、私たちは重く受け止め、控訴の意志を明らかにした原告被害者らのたたかいを今後も支えていかなければならないと考えます。

◆ 日本軍性暴力被害者を当事者とする裁判 日程 ◆

海南島戦時性暴力被害事件訴訟	第5回口頭弁論
2002年11月13日(水) 13:15～	東京地裁627号法廷
中国・山西省性暴力被害者裁判	第16回口頭弁論 結審
2002年11月21日(木) 13:15～	東京地裁527号法廷
韓国太平洋戦争犠牲者遺族会訴訟	第5回口頭弁論
2002年12月17日(火) 11:30～	東京高裁813号法廷
中国人元「慰安婦」裁判第一次訴訟	第6回口頭弁論
2003年1月29日(水) 13:30～	東京高裁810号法廷

徐京植さんの講演会への呼びかけ

＜徐京植さん講演会のご案内＞

『東アジアの断絶は越えられるか
—半難民（在日朝鮮人）の位置から—』

11月23日（土・祝）14：00～

ふくふくプラザ（福岡市市民福祉プラザ）
6階601研修室
TEL 092－731－2929
地下鉄「唐人町」駅下車
（主催）徐京植さん講演会実行委員会

今こそ「断絶」のかなたから呼びかける「連帯」の声を聴こう

花房俊雄

「日朝平壌宣言」が交わされた九月一七日、衝撃的な拉致問題のニュースが流れてきた。「平壌宣言」の中の朝鮮植民地支配への賠償が「経済協力」に歪曲されている事への落胆もさることながら、拉致問題が引き起こすであろう反北朝鮮、ナショナリズムの噴出に危惧がひろがった。連日の拉致問題ニュースの推移を固唾を呑みこんで見守る中で、二四年間の苦悩と孤独の中で解決を訴えつづけてきた被害者家族の証言に接し、深い感情に揺り動かされた。戦後補償の被害者やその遺族の証言を聞いているようであった。拉致被害者やその家族に向き合う事をどこかで避けてきていた自分を恥じた。

日朝国交回復に消極的な日本政府はもとより、日朝国交回復に熱心な社会党や知識人、人権に取り組む市民団体も拉致被害者家族の訴えに耳を貸そうとしなかった。その結果拉致被害者の支援は「新しい歴史教科書をつくる会」と同じ主張をしている右翼の団体や国会議員が固め、被害者や被害家族の尊厳回復の切実な要求が、北朝鮮敵視の世論に誘導されている。日朝交渉のもう一方の重大な課題である植民地支配下の被害者たちへの賠償・尊厳回復は無視され、「強制連行や『慰安婦』問題などの過去の問題と、現在進行している拉致問題を同一視するな」との声高な主張がはびこり、「こんなひどい国になぜ経済支援をしなければならないのだ」という声さえ流れ出している。歴史認識を欠如した洪水のようなマスコミ報道により日本社会のナショナリズムは危険水域に達しようとしている。

拉致被害者やその家族の苦悩や怒りに共振する日本人が、相手国の戦後半世紀以上放置されている強制連行被害者やその遺族たちの苦悩や怒りに思いを馳せる事ができないのだろうか。九〇年代初めにあふれ出た「慰安婦」被害者たちの証言やニュースを取り上げたマスコミは、歴史の流れの中で日朝交渉を掘り下げた報道をすることはできないのであろうか。

深い歴史の断絶が日本社会を覆っている。その断絶が北東アジアの断絶を生み出し、朝鮮半島やアジアの人々の和解への呼びかけと平和への願いを危ういものにしている。

徐京植さんは「慰安婦」問題に関わり、「慰安婦」被害者の証言が日本社会で「消費」されていることを憂いながら、歴史認識の断絶を埋めるための広い視野に立った思索と提言を日本社会にし続けている、数少ないの知識人の一人です。関釜裁判を支援する会の会員である平尾さんと多くの市民の努力で今回、徐京植さんを福岡にお呼びすることになりました。二十三日の講演にはぜひ足をお運びくださいますよう願っています。

活動日誌（３９）

＜2002年＞

６月20日　九州、山口の不二越支店や関連会社に「未払い賃金」の解決を要請するFAXを送付

６月24日　関釜裁判ニュース第39号を発送

６月 30 日　有事法制に反対する辺見庸講演会とピースウォークその後の関釜裁判を支援する会を韓国のテレビ局MBCが取材

７月４日　7・20「慰安婦」問題学習集会にむけて第2回会議

７月７～９日不二越闘争に、土井（広島）都築寿美枝（福山）福留、花房（福岡）が参加

７月７日　不二越闘争第3回全国会議（於　富山）

７月８日　富山社会保険事務所との交渉　不二越本社前闘争　記者会見　富山県集会

７月10日　小松空港より被害者一行帰国

７月５日　図書館運営小委員会の懇談会で恒久平和調査局設置法案（国立国会図書館法の一部を改正する法立案）を田中甲議員が法案の趣旨説明

７月16日　第111回定例会

７月18日　参議院内閣委員会「戦時性的強制被害者問題解決促進法案」趣旨説明(岡崎トミ子議員)

７月23日　内閣委員会「戦時性的強制被害者問題解決促進法案」集中審議（野党女性議員の懸命の働きかけで実現）

７月20日　「慰安婦」問題学習集会（吉見義明さん講演）が「つくる会」教科書を許さない市民ネットワーク・福岡の主催で開かれ，100人以上が参加した。

８月５日　7・20「慰安婦」問題学習集会の反省会

８月20日　第112回定例会

９月１日　福山で不二越訴訟について福岡と広島・福山各連絡会の合同会議

９月６日　ソウルの不二越営業所に朴小ト得さんら9人で抗議行動

９月17日　第113回定例会　吉見義明さんの講演録が完成

９月27日　徐京植さん講演会実行委員会

10月１日　不二越第二次訴訟弁護団会議（於金沢）

10月８日　第２回徐京植さん講演会実行委員会

10月 12 日～北陸連絡会メンバーと弁護士が韓国で被害者の聞き取りに福留さん通訳で同行

10月15日　第114回定例会

10月８日　徐京植さん講演会実行委員会

10月24日　「愛国心」評価の削除を求める会結成

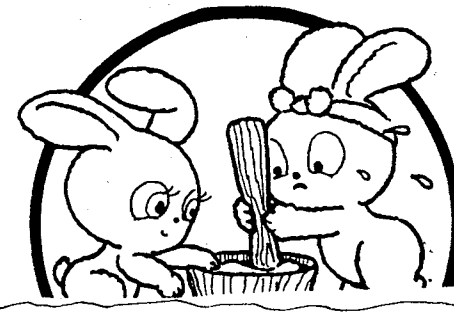
10月25日　求める会福岡市小学校校長会へ申し入れ

11月１日　求める会福岡市教育委員会へ申し入れ。夜、ウリサフェ、全朝教と合同会議

11 月７日　不二越第二次訴訟弁護団会議（於金沢）花房参加

11月９日　吉見先生講演会（広島）

11月９・10日　関釜裁判ニュース編集作業



～明太（メンタク）がつぶやく～

京都まで「大レンブラント展」を見に行って来ました。陰影の中に、人生が凝縮しているような数々の肖像画は見ごたえありました（Ys）

関釜裁判を支える広島連絡会
土井桂子

関釜裁判を支える福山連絡会
市民運動交流センターふくやま

関釜裁判を支援する県北連絡会
福政康夫

関釜裁判ニュース　40号
２００２年１１月１７日発行
編集作業人　井上由美　尾関直子
花房恵美子
発行
戦後責任を問う　関釜裁判を支援する会
代表　松岡澄子　入江靖弘

E-mail　hanafusa@df6.so-net.ne.jp

http://www.h3.dion.ne.jp/~kanpu

会費　3,000円
郵便振替０１７４０－０－４７６７８
口座名　関釜裁判を支援する会

★WEB版関釜裁判を支援する会★

随時更新していますので、ホームページの方もご覧ください。ホームページの内容、体裁等につきましてご感想、ご意見がありましたら、メールにてお寄せください。
http://www.h3.dion.ne.jp/~kanpu